

令和2年度

連携活動記録報告書

VOL. 11



令和3年3月

山形大学附属学校

目次

はじめに	・ ・ ・ ・ 1
I 連携活動の記録	
令和2年度 附属学校園配置のコーディネータの成果と課題	・ ・ ・ ・ 3
令和2年度 附属学校園「まつなみ学習支援室」の成果と課題	・ ・ ・ ・ 5
令和2年度の活動を振り返って	・ ・ ・ ・ 6
1 幼小中連携	
（1）幼小連携	・ ・ ・ ・ 12
（2）幼中連携	・ ・ ・ ・ 18
（3）小中連携	・ ・ ・ ・ 20
2 特別支援学校連携	・ ・ ・ ・ 21
II 山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程	・ ・ ・ ・ 27
III 資料	
附属学校研究・連携推進委員会規程第7条に定める 部会に関する申し合わせ	・ ・ ・ ・ 31
附属学校研究・連携推進委員名簿	・ ・ ・ ・ 33

はじめに

山形大学附属学校では、4つの学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行うことを目的として、「附属学校研究・連携推進委員会」の下に、「幼・小・中連携部会」と「特別支援連携部会」の2つの部会を設置している（もう1つの「共同研究推進部会」については『共同研究報告書』を参照されたい）。本活動報告書は、2020年度の山形大学附属学校園における「幼・小・中連携部会」と「特別支援連携部会」の活動の記録をまとめたものである。

山形大学附属学校では、子どもたちの交流活動や連絡会、研修会などを通じて、4校園の教員が互いの教育現場を参観し、意見や情報を交換する中で、それぞれの教育目標に応じた特徴を持つ各学校園の教育実践から、附属学校園における新たな連携のあり方を意識した教育方法の検討に取り組んできた。また、山形大学附属学校には、特別支援教育コーディネータとメンタルケア・コーディネータ（平成23年度から）及び英語教育コーディネータ（平成27年度から）が配置されており、「まつなみ学習支援室」（平成24年設置）とともに、4つの附属学校園にわたる多面的な連携を担い、教育支援を行ってきた。

今後、山形大学附属学校では、「一人一人の幼児・児童・生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となれる資質・能力を育む」ために次の5つの教育活動を、幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校が一体的に、連携・協力しながら進めていきたいと考えている。

- ① ICTを活用し探究的に学ぶ力を高める教育
- ② 郷土愛を基盤に「SDGs」（持続可能な開発目標）を踏まえた教育
- ③ グローバル化に対応できるコミュニケーション能力（英語力等）を高める教育
- ④ 共生社会を築くインクルーシブ教育
- ⑤ 個性を尊重し伸ばす教育

幼稚園での「遊び込む教育」（探究の基礎）は、小学校で育まれる地域に根ざした探究的な学びへ、さらに、中学校ではより広く世界に視野を広げつつ、関心領域の深い理解に届く探究的な学びへと展開され、その先に高等学校や大学における主体的に探究する学習者に成長していくことが期待される。また、幼稚園から始まる共同生活において困難を抱えがちな子どもたちの支援においても、多様性を許容するインクルーシブ教育の観点から、小学校、中学校と進む中で、学校全体で子どもたちのより豊かな成長を促すようなしくみを構築することが求められている。このような課題への取り組みは、公立学校のモデルとして全国の国立大学附属学校に要請されていることでもある。

本報告書をご高覧いただき、忌憚のないご意見やご要望をいただければ幸いです。

令和3（2021）年2月

山形大学附属学校運営部長 中井 義時

I 連携活動の記録

令和2年度 附属学校園配置のコーディネータの成果と課題 その1

附属小学校長 樋口潤一

メンタルケアコーディネータ（中学校籍 教諭） 鎌田 弘子
特別支援教育コーディネータ（特別支援学校籍 教諭） 早坂 美紀

配置のねらい

附属学校園の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う

- ◎教育相談と特別支援教育において、校種間の連携及びその一貫性を図る。
- ◎附属学校園全体の特別支援を必要とする幼児児童生徒への支援の充実とそれに係る体制整備を推進する。
- ◎附属学校園全体の心の問題を抱える幼児児童生徒への支援の充実とそれに係る体制整備を推進する。

主な職務

- ◎幼小連携、小中連携における継続した支援・指導の中核
- ◎該当する幼児児童生徒への直接の支援・指導
- ◎学級担任や教科担任、養護教諭への専門性を生かした支援
- ◎各校園の教育相談担当者・特別支援コーディネータ・養護教諭との連携
- ◎まっなみ支援室における支援員への専門的な助言

今年度（配置10年め）の基本的な考え方

【目標】

- ・早期支援の立場から幼稚園における支援や適正な就学指導に生かす機能強化を図ること。
- ・各学校園でコーディネータを積極的に活用した組織的な支援体制の充実を図ること。
- ・個に応じた支援のあり方（当該児童生徒のみならず保護者支援や担任支援も含む）を探究すること。
- ・年齢に応じた発達課題を整理し、幼から中までの12年間継続して課題解決に向かっていくこと。
- ・まっなみ学習支援室の支援員を適切に活用し、別室での学習・取り出し指導の充実を図ること。

【役割】

- ・附属学校園の課題を把握し、各校園の担当者と一緒に校園間をつないでいく。
- ・各校園の担当者と連携し、各校園の課題解決に向けて指導支援を行う。

【具体策】

- ・各校園の状況を把握し、幼児児童生徒に係る情報をつなぎ、校園間の指導支援の一貫性を担保する。
- ・先進的・専門的な情報を収集し、各校園の教員に研修等を通して指導する。

今年度の成果

教育相談と特別支援教育における校種間の連携及び一貫性が強化された。

→幼稚園・小学校・中学校で様式を統一した「個別の教育支援計画」を用いて、より効率的に情報共有を図ることができ、適時・的確な個別対応を行うことができた。

→保護者面談の計画的・継続的な実施、関係機関との連携窓口としての機能が定着してきた。

- ◎コーディネータ及び支援員が幼稚園と小学校の両方に勤務し、丁寧な幼児の実態把握と情報共有を行うことで、幼・小の円滑な指導・支援の連携を一層強化することができた。
- ◎指導対象幼児・児童・生徒について、特別支援学校コーディネータによるWis kIVの実施や分析も含めたアセスメントを行うことで、よりの確な支援を行うことができた。
- ◎校長・教頭・教務主任・まっなみ支援室長・養護教諭・支援員との「ランチ・ミーティング」を毎日行うとともに、コーディネータやSCも含め状況に応じたケース会議を適時開催できたことで、迅速かつ的確な情報共有が図られ、未然防止と早期対応が可能になり、組織的支援の一層の充実を図ることができた。
- ◎教育課程説明会や懇談会等で、まっなみ支援室の機能について説明を重ねていることで、保護者へのより広い周知が図られ、相談を受けることが増えてきている。
- ◇コーディネータを講師として、ソーシャルスキル・トレーニング等の研修を実施しており、今後も継続して研修を行うことで、計画的・継続的に教員の資質・能力向上を図っていきたい。

令和2年度 附属学校園配置のコーディネータの成果と課題 その2

附属小学校長 樋口潤一

英語教育コーディネータ（附属小学校籍 教諭） 佐藤 大輔

配置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

- グローバル化に対応した教育環境づくりの推進として、小学校における英語教育の充実強化、中学校における英語教育の高度化に対応する。
- 附属学校園全体の英語教育における幼児児童生徒への支援と英語教育の体制整備、推進、充実を図る。
- 異学校種間の英語教育指導のあり方に関し、地域のモデル的実践を行うとともにその周知を図る。

主な職務

- 大学教官との連携をとりながら、附属学校全体の英語教育における幼児児童生徒への支援・指導の充実に向けて、その機能・役割を踏まえた専門性を確保しながら体制整備を行う。
- 小学校における外国語科及び外国語活動の授業において、担任と連携し学習指導やその補助を行う。
- 英語教育の充実強化・高度化に対応するための指導力向上プログラム等の開発や作成を行う。
- 附属学校全体の英語教育とその支援・指導を担当する教員として、幼小中一貫教育を支える。
- 大学・学部等における研修を積極的に行い、英語教育コーディネータとしての資質の向上に努める。

今年度（配置6年め）の基本的な考え方

【目標】

- 新指導要領に基づく外国語科及び外国語活動の指導充実と年間指導計画の策定・体制整備に向けた情報収集や本校教員の資質向上を図るための情報提供
- 附属中学校の英語科と小学校の外国語科及び外国語活動の接続に資する連携強化

【役割】

- 学級担任やALTと連携して、外国語科及び外国語活動の時間を受け持ち、その充実を図る。
- 県や市の研修を受けるとともに、地域の小学校の研究会・研修会等において指導・助言を行う。
- 附属中学校英語科の授業づくりへの支援（TTでの授業参加）
- 附属小学校外国語科及び外国語活動への附中英語科教員の参加をコーディネート

【具体策】

- 5～6学年における外国語科（週12コマで年間420コマ）を担当する。
- 3～4学年における外国語活動（週5コマで年間175コマ）を担当する。
- 研修会において、外国語科及び外国語活動の授業を提案する。
- 新学習指導要領全面実施に向けた、年間指導計画を策定する。
- 研修や参観した公開授業等の情報を整理し、校内研修会等で報告する。
- 毎月月曜日に附中英語科でのTT指導後の振り返りと打合せを行う。

- 今年度の成果
- 年間指導計画に基づき、PDCAを意識して、今年度も加筆修正しながら改善を進め、新学習指導要領の全面実施に向けた取組の一層の充実を図ることができた。
 - 授業づくり研修会（11月）における授業提案を、動画配信やインターネット双方向通信システムを活用しながら行うことで、小学校外国語科のモデル実践を、幅広く県内外に示すことができた。
 - （一財）山形県教育共励会の優秀教育実践賞を受賞し、実践のプレゼンテーションを行うとともに、実践集録に掲載されることで、成果の周知・普及を図ることができた。
 - 山形県小学校外国語教育研究会研究協議会（2月）において授業提案を行うことで、山形県全体の外国語教育の充実に資するモデルを示し、議論・検討を進めることができた。

令和2年度 附属学校園「まっなみ学習支援室」の成果と課題

附属小学校長 樋口潤一

設置のねらい

附属学校園間の連携を強化し、円滑な接続と相互交流による一貫性の高い教育を行う。

- ◎附属学校園全体の特別支援を必要とする幼児児童生徒への支援の充実と体制整備の推進を図る。
- ◎附属学校園の特別支援教育並びに教育相談機能の一層の充実と活用を図る。
- 県内小学校のLD等通級加配校のモデルとなる研究・実践を積み重ねる。

主な職務

学級担任、各コーディネータ、SC（必要に応じて、中学校のSC及び大学の心理教育相談室のスーパーバイザー）と連携して主に以下の職務を行う。

- ◎学習面、生活面での支援（行動観察、TT指導、取り出し個別指導、諸検査の実施）
- ◎メンタル面での支援（教育相談、アドバイス等）
- ◎保護者との面談、教育相談
- 研修会等の周知・啓発活動の計画・実施

支援室の運営

- ・室長：小学校教育相談主任 長岡 初美教諭（附属小学校在籍）
- ・副室長：特別支援教育コーディネータ 早坂 美紀教諭（附属特別支援学校在籍）
：メンタルケアコーディネータ 鎌田 弘子教諭（附属中学校在籍）
- ・支援員：1名・・・支援員（週5日5h勤務）
- ・スーパーバイザー：佐藤 宏平氏（山形大学地域教育文化学部准教授）

今年度の成果

- 附属学校園間の情報共有が迅速かつ的確に図られ、特別な支援を必要とする幼児・児童・生徒への継続的な支援が充実した。
- 心理検査等による客観的なデータの収集・活用など、専門的な支援が可能になった。
- 幼稚園児と小学校低学年への早期発達支援及び、支援員の幼児児童への個別的・継続的支援が有効に機能した。

- ① コーディネータの専門性を生かしたアドバイスを適時に得ることができた。
- ② 個別の指導計画及び保護者の了解を得た教育支援計画に基づいて支援を行い、本人及び保護者の安心感・信頼感の醸成につながっている。
- ③ 附属学校園教員の特別支援教育に対する意識が高まり、各教員がいつでも相談でき組織的支援が受けられるという安心感が広がるとともに、各学年・学級における特別支援教育力の向上につながった。
- ④ 来室時に限らず、教室や園に出向いてのアセスメントや支援を行うことにより、支援室の学びと学級での学びのつながりを強化することができた。

今後に向けて

- ① 附属学校園教員の特別支援教育力の更なる向上をめざし、教職員の研修及び保護者への周知等を計画的・継続的に実施する。
- ② 支援児童に対する一貫した支援ができるよう、幼・小・中の連携を一層強化していく。

令和2年度の活動を振り返って

メンタルケアコーディネータ 鎌田 弘子

1. 活動報告

(1) 特別支援教育コーディネータとの連携

小中連絡会において、新入生の小学校時の生活の様子や人間関係、これまで行ってきた支援について情報提供をいただいた。

(2) 附属小学校の教育相談担当との連携

小中学校に兄弟が在籍している生徒について必要に応じて情報交換を行った。また、中学校に在籍している生徒の様子について情報提供を行った。

(3) 附属幼稚園との連携

週2日、園児とともに様々な活動と一緒に園児理解に努めた。また、担任と情報共有を密にしながら支援を要する園児への保育支援にあたった。

(4) 附属小学校との連携

今年の1月から週に一度、6年生の授業参観を通して児童理解に努めた。特に支援を要する児童については、その児童の様子や周囲の関わり方、教師の支援の仕方について観察し、中学校への引き継ぎ事項をまとめた。

(5) 中学校スクールカウンセラーとの連携

- ・カウンセリング後、相談者から了解を得た内容を聞き取り、担任に伝達した。
- ・7月に中学1年生を対象にスクリーニングを実施。授業中の生徒の様子を観察し、支援の必要な生徒への支援方法について助言をいただいた。
- ・全校生を対象に、「人との関わり方」と「ストレスマネジメント」の講話を実施。今年度は講話を収録したものをクラスごと各教室で視聴した。
- ・教育相談部会において生徒の情報交換の際、特別な支援が必要な生徒への具体的な支援について専門的知見からご指導いただいた。

(6) 中学校養護教諭との連携

- ・毎日、生徒の情報交換と今後の対応について相談した。
- ・保健室来室者へ声をかけたり、チャンス面談を行ったりするなどして学年に繋いだ。
- ・SCとの情報交換を通して、今後の生徒への対応について相談した。
- ・別室教室の運営について相談しながら進めた。
- ・教育相談・発達障害について助言をいただいた。

(7) 中学校の学級担任・教科担任との連携

- ・「スズキ校務」を活用し、その都度生徒の様子やカウンセリングの内容を記録し、担任や学年担任団に情報提供した。
- ・担任、学年担任団との情報交換を積極的に行い、今後の対応について検討した。状況に応じ

て校長や教頭に報告し、SCに繋いだりケース会議を開いたりした。

- ・学級全体や特別な支援が必要な幼児・生徒への支援方法について確認し、指導にあたった。
- ・担任と保護者の関係を支える対応の検討を行い、必要に応じて保護者面談に同席した。
- ・別室生徒のために授業内容や学習支援について確認したり、授業に出られるような対応策を検討したりするなどした。

(8) 教育相談部会の実施(中学校)

- ・年度当初に教育相談の年間計画を作成し、教育相談アンケートのみならずSC講話やエンカウンター、ソーシャルスキルトレーニングなども計画的に実施できるようにした。
- ・部会を月2回設け、生徒の情報交換を行い、必要に応じて支援策の検討を行った。
- ・教育相談アンケートを年5回実施し、生徒の現在の状況や悩みなどを把握し、面談等で対応できるようにした。
- ・Q-U検査を年2回実施し、Q-Uの結果を受けて分析方法を提供し、担任と個々の対について検討した。
- ・全職員を対象に生徒理解研修会を実施し、外部講師を招いて、教育相談の重要性や生徒保護者面談の手法について学ぶ機会を設けた。

(9) 不登校生への対応(中学校)

- ・ケース会議を実施し、生徒の状況把握と対応策の検討を行った。
- ・担任から家庭訪問や電話での様子を聞き、対応策を検討した。

(10) 別室で過ごす生徒への対応(中学校)

- ・教室に入れない生徒のために部屋を確保し、担当教員を時間割に組み入れ、毎時間、教員が別室で生徒の支援にあたるようにした。
- ・個別に月目標や具体的な取り組みを確認し、毎週、時間割を作成して目標に向かって学習できるように環境を整えた。
- ・必要に応じて保護者面談を行い、生徒の学校や家庭での様子を共有し、今後の対応について確認した。
- ・別室で過ごす生徒が授業に入れるように教科担任と連携して学習支援を行うと共に、SGE、SSTを行い、人との関わり方について学ぶ機会を取り入れた。

2. 成果と課題(成果○、課題△)

- 中学校では、全職員の協力を得て今年度から別室の運営を本格的に始動することができた。別室担当を時間割に組み込み、毎時間、計画的に生徒の学習支援等を行うことができた。
- 昨年から引き続き、個別の教育支援計画および個別の指導計画の様式を小学校、中学校で統一することで、児童生徒の情報交換が密になり、つながりのある支援を行うことができた。
- 今年度から小学校6年生の授業参観の機会をいただき、支援を要する児童やその対応について児童の様子を観察しながら児童理解に努めることができた。小中学校でつながりのある支援になるよう、さらに引き継ぎもしっかり行っていきたい。
- △小中学校のつながりのある支援をより一層充実させていく必要がある。高学年の児童と関わる機会を増やすことで児童理解を深め、児童が中学校に進学した際、少しでも安心して学校生活を送れるように支援体制を整えていきたい。

令和2年度の活動を振り返って 2

附属学校特別支援教育コーディネータ 早坂 美紀

1 主な活動の報告

(1) 教育的支援

主に、幼稚園、小学校において、学級や個人に対する教育的支援を行った。

幼稚園では、主に年少、年中での支援が多かった。個別の支援だけではなく、遊びの中で、友達とのかかわりを見ながら、いざこざに対する仲介をしたり、より良いコミュニケーションの方法を伝えたりした。こだわりがあり、切り替えが難しい幼児については、担任や養護教諭)、家庭との情報交換を行い、支援のポイントを共通理解しながら支援にあたった。

小学校では、5月より分散登校が開始し、これまでの日常とは違い、少人数での授業ということもあって、在校生は比較的落ち着いてスタートした。新入生においても、支援の必要な児童がいたが、学校全体とまつなみ支援室の教員の計画的なサポートが上手く機能し、良いスタートができた。一斉での学習に困難があるため、必要に応じて、使用するプリントを準備したり、担任へアドバイスしたりした。昨年度から引き続き支援や見守りが必要な児童については、教室を巡回したり、担任から情報を得たりしながら、必要があれば直接的な支援をしたり、教室で見守ったりした。昨年度から引き続き、まつなみ支援室で個別の指導をしている児童については、分散登校が終了し、しばらくした7月頃から徐々に開始した。主に、「アンガーマネジメント」、「アサーショントレーニング」、個別の課題にそったSST(ソーシャルスキルトレーニング)を行った。また、落ち着かなくなった学級へ入り、学習に困難のある児童への支援、好ましくない振る舞いをする児童への支援等も行った。

(2) ケース会や情報共有

今年度は、幼稚園、小学校でのケース会にかかわった。幼稚園では、主にこだわりや切り替えの難しい幼児に対するケース会、友達との関係に課題のある幼児、保護者とのかかわりに課題のある幼児等の情報共有を行った。

小学校では、昨年度に引き続き、管理職や校内の特別支援教育コーディネータ、養護教諭、支援員等と定期的にミーティングを行い、個別の支援をしている児童、気付きがちな児童や学級についての情報共有を密に行ってきた。また、新入生1名については、学年団とのケース会を定期的に関き、支援の方向性を共通理解した。場合によっては、学年団、管理職等で話し合われたことを、情報共有させていただくこともあった。ケース会を続けてきたことで、学年の先生で話を進めていく等、先生方の積極的な姿勢が見られている。

(3) まつなみ学習支援室および支援員等との連携

まつなみ学習支援室が設立され今年度で9年目となった。幼稚園の保育支援は、引き続き支援員とメンタルケアコーディネータ、附属学校特別支援教育コーディネータ3名が交代で勤務しながら行っている。小学校においては、支援員と附属学校特別支援教育コーディネータが交代で勤務し、かつ週に1回は同時に勤務する体制である。

昨年度から、附属学校特別支援教育コーディネータや支援員が決まった時間サポートに入ることができるよう、時間割を作成して教職員へ伝えている。時間割は、支援の必要性に応じて、その都度変更している。また、先生方には授業中に急にサポートが必要になった時にも、気軽に声をかけていただけるよう伝えている。支援員や附属学校特別支援コーディネータがサポートに入り、授業がスムーズに進んだこともあった。

幼稚園では、支援の必要な幼児、気がかりな幼児について、担任、養護教諭との情報共有を行っている。その中で、有効と思われる支援方法、教材等を提案してきた。小学校においては、まつなみ支援室での個別指導の記録、巡回時の気がかりな児童についての記録を校内関係者に回覧することで、指導・支援や児童の様子について共通理解を図ることができ、その後の指導・支援に活かすことができている。

(4) 保護者支援

保護者支援においては、幼稚園と小学校においてかかわった。幼稚園は、送迎時に担任と保護者の情報共有が常にできるため、保護者から直接、担任へ相談しやすい。日々の情報や懇談等で得られた情報を定期的に共有し、1月には、年中の保護者向けにこれからの生活を見据えた園生活について、お話をする機会をいただいた。年長、小学校就学へ向けて、園と保護者がより良い連携ができるよう、附属学校特別支援教育コーディネータの立場からお話しできたことは、とても有意義だった。

小学校では、幼稚園から個別の教育支援計画を作成している児童の保護者との面談がスムーズにいつている。保護者の家庭での困り感、子育てへの悩み等は、スクールカウンセラーとも連携しながら対応している。保護者からの要望に応じてスクールカウンセラーとの面談も随時行われており、より保護者に寄り添った支援体制が整っている。また、必要に応じて専門機関を紹介したことで、保護者自身が安心して相談できる専門機関ができたケースもある。

2 今後の取り組みと課題

(1) ケース会や保護者支援等、各校園内のチーム体制については、確立している。小学校においては、まつなみ学習支援室が様々な悩みをもった保護者にとっても、より気軽に相談できる場所でありたいと願う。コロナ禍の状況で、学校にも家庭にも様々な変化が起きているからこそ、メンタル面での対応も必要になってくる。そのためには、定期的にまつなみ学習支援室の活用についてお知らせする等の工夫も必要である。担任だけでなく、チームとして児童本人、家庭への支援がよりスムーズにできることが課題である。

(2) 小学校のまつなみ学習支援室では、これまで個別の指導を中心に行ってきた。しかし、対人関係における課題が類似している児童もいることから、小集団でのソーシャルスキルトレーニングが可能になると、1対1での学習よりも児童同士のやりとりを通して相手の気持ちを考えたり、いろいろな友達の考えを聞いたりする学習ができるので、実践的で有意義な指導になると思われる。ここに至るには、本人の了承、保護者の理解が不可欠なので、慎重に進める必要がある。

今年度の活動を振り返って

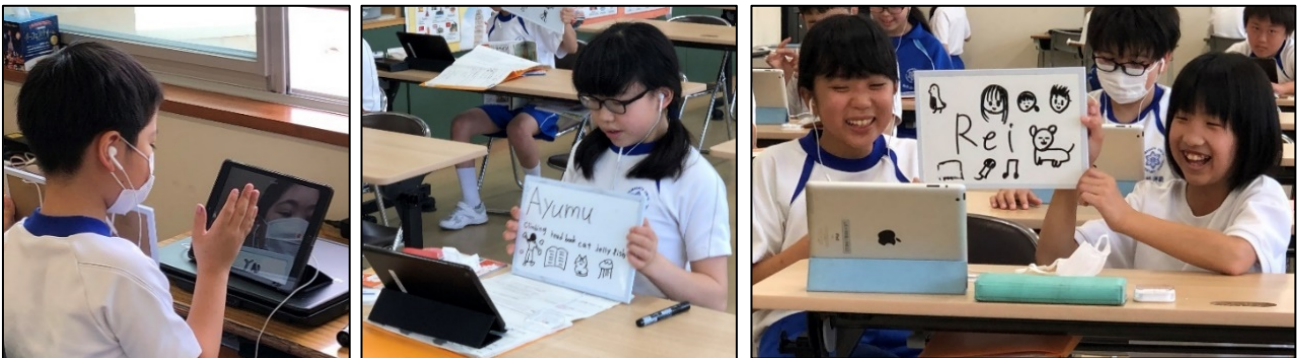
英語教育コーディネータ 佐藤 大将

1 今年度の活動の報告

(1) 小学5・6年生における「外国語科」の授業・・・年間70時間×6クラス

「外国語を通じて、自らかかわりながら相手や他者とつながろうとする子ども」の育成を目指し、コミュニケーションを図る必要感が生まれる目的・場面・状況の設定について、新たな可能性を模索してきた。

6年生では、ICTを効果的に活用しながら学習を進めることができた。コロナ禍で直接会うことができないALTのポール先生に自己紹介をするために、1人1台の端末を使って動画をつくるという学習を行った。初めは、カメラに向かって自信がなさそうに話していた子どもたちであったが、自分の納得のいくまで何度も動画を撮り直しているうちに話す内容を全て暗記し、単元終末には自信をもって話すことができるようになった。また、英語学習アプリを活用することで、自分の苦手な表現を選び、端末から流れる音声を真似して発音しながら練習することができるようにした。1人1台の端末があるので、密を避けながら、自分のペースで英語を学ぶことができる新しい学習スタイルとして、他の学習でも応用できると考えている。



5年生では、総合的な学習の時間を主軸としながら教科横断的に学びを進めてきた。2021年のオリンピックホストタウン応援団になった子どもたちは、外国の人たちに日本や山形の魅力を発信するために、山形市PR動画を作成した。自分が紹介したいことを伝えるために必要な英語を主体的に学ぶことができたと感じている。撮影した動画に編集を加え、山形市に提出することができた。



(2) 小学3・4年生における「外国語活動」の授業・・・年間35時間×7クラス

「Let's Try! ①②」を主な教材として扱いながら、「聞く」「話す」活動を中心に学習を進めてきた。5・6年外国語科の授業とのつながりを意識しながら、自分の思いや考えを伝え合う言語活動を大切に授業づくりに取り組んできた。

4年生では、GIGAスクール構想によって今年度から導入されたChromebookを活用し、小学校1年生の時にお世話になった6年生（現在の中学3年生）に、動画でメッセージを送るという学習を行った。(1)で紹介した6年生の動画づくりのノウハウを生かすことができたと感じている。子どもたちは、学習してきた英語を使うだけでなく、分からない言葉を自分で調べたり、ジェスチャーや絵で表現したりしながら、伝え方を工夫することができた。

3年生では、コロナ禍の影響もあり、昨年度とカリキュラムを変更し、年度初めにローマ字とアルファベットを重点的に学習することにした。ローマ字の歴史を知ること、間違いやすい「訓令式」「ヘボン式」「英語式」を区別しながら覚えることができたと感じている。そして、実際にパソコンのキーボードで文字入力を体験させることで、ローマ字を学ぶ必要感がさらに高まると感じた。

(3) 小中連携の取り組み

今年度も、コーディネータが中学1・2年生の授業に参加したり、中学校教員が小学校に来て授業を行ったりした。また、それぞれの授業研究会に参加し、小中連携の可能性について子どもの姿をもとに話し合うことができた。このように、小中でお互いの授業を見合ったり、一緒に授業づくりを行ったりする機会をさらに増やしていきたい。今後も、「附属小中CAN-DOリスト」を更新しながら、小中それぞれで目指す子どもの姿について議論していくことが、小中連携において極めて重要であると考え。そして、附属学校の小中連携の取り組みを、他校に広めていきたい。

(4) 研究会における授業提案

11月の授業づくり研修会では、第5学年外国語科「日本や山形の魅力を紹介しよう」の授業を提案した。山形大学の佐藤博晴先生、附属中学校の水田先生をはじめ、コメンテーターとして、山形市教育委員会の田中千絵指導主事、川西町立小松小学校の市川道子先生をお招きした。オンラインも活用しながら、県内の先生方や学生の皆さんと議論することができた。

2月には、今年の11月に山形県で行われる英語の全国大会に向けたプレ授業研究会が行われ、第5学年外国語科「道案内をしよう」の授業を提案した。県内の外国語教育のエキスパートが集まり、実際に授業を参観して話し合いを行った。

「教科横断的な単元構成」「指導と評価の一体化」「教科担任が行う外国語の授業の可能性」「ICTの活用」など、今後の外国語教育につながる様々な話し合いができたと感じている。11月の全国大会は、小学校の授業実演者として、山形大学附属学校として大切にしていることを全国の先生方に発信するチャンスととらえている。今後も様々な先生方と連携しながら、準備を進めていきたい。

(5) これまでの実践を県内外に発信

今年度は、様々なところから原稿の執筆依頼があり、自分の実践を振り返る機会をいただいたと感じている。「山形県教育共励会」に提出した実践報告は、県内の数多くの応募の中から最終審査まで残り、有難いことに令和2年度の優秀教育実践顕彰に選ばれた。また、「新興出版社啓林館」に提出した実践報告についてはホームページ上に掲載され、全国の先生方に本校の取り組みを発信することができたと感じている。拙い実践ではあるが、授業づくりのポイントや単元構成、子どもの学びの様子、教師の働きかけなど、実際にやってみて感じた成果・課題等を積極的に情報発信していくことが、附属学校で大切にしている地域貢献につながっていくと考える。

2 成果(○)と課題(▼)

- 教科横断的にカリキュラムをマネジメントすることで、主体的に学習に取り組む子どもの姿が見られた。特に、総合的な学習と関連付けることで、様々な探究の可能性があったと感じた。
- ICTを効果的に活用することで、コロナ禍においても動画でメッセージを伝えたり、密を避けながら自分のペースで英語を学んだりすることができた。
- ▼来年度は小中連携の取り組みに加え、幼小連携にも着手したいと考えている。例えば、英語の絵本の読み聞かせを行ったり、小学校の外国語活動につながる言葉遊びを行ったりすることで、幼小連携の一つのモデルを示していきたいと考えている。
- ▼外国語の評価については、まだまだ課題があると感じている。ポイントを絞った評価計画や評価方法について、中学校の実践も参考にしながら、さらに研究を進めていく。

幼小連絡会 ねらいと年間計画

(1) ねらい

・新1年生の学習や生活の様子を参観を通して、各児童の検討していきたい面や今後の課題について共通理解を図りながら、見通しをもつことができるようにする。

(2) 計画

期 日	場 所	窓 口	内 容	附小担当	附幼担当
5月12日 ※臨時休業により中止	附小	附小	第1回幼小連絡会 （附幼・一般） 1年生の児童の学習の様子を幼稚園教員が参観し、その後全体で話し合いをして情報交換をする。	教務 教頭	教務
11月19日	附幼	附幼	第2回幼小連絡会 小学校教員（1年担任・校長・教頭・教務・教務副・養護教諭）が幼稚園児の活動を参観し、それらをもとに幼小の学びや育ちについて共通理解を図る。	教務 教頭	教務
12月11日	附小	附小	1年生のフェスティバルに年長児を招待し、参観してもらう。 ※新型コロナ対応による動画撮影を参観	水川	那須
1月18日 ※新型コロナ感染防止のため中止	附小	附小	年長児が小学校に来校し、1年生の手伝いのもと、給食を一緒に食べる交流会を行う。 ※1年生から年長児に、給食の様子を解説する動画と、おすすめの給食のメニューやおいしさを紹介する手紙の贈呈	水川	那須
1月ころ ※感染状況を見て延期 2月16日	附小	附小	生活科などの1年生の学習の様子を見学したり、一緒に活動に参加したりする。	1年担任	那須
2月10日	附小	附小	第3回幼小連絡会 1年生並びに年長児に関わりある幼稚園担当が小学校1学年の学習を参観し、小学校教員と情報交換を行う。	教務 教頭	教務
2月15日	附小	附小	新入児情報交換会 （一般） 一般園の年長児に関わりある教員が1学年の学習を参観し、小学校教員と情報交換を行う。	教務	なし

※ 太枠は、附属連携に関するもの、朱書きは新型コロナの影響による変更点

第2回幼小連絡会 報告

- 1 ねらい 小学校1年生の就学後の様子、年長児の育ちについて情報交換し合い、幼小連携を深める。
- 2 日 時 令和2年11月19日（木）
- 3 場 所 山形大学附属幼稚園 遊戯室
- 4 参加者 小学校・・・樋口校長・高橋教頭・1年生担任水川教諭・大澤教諭・相澤教諭
芦野教諭・鈴木養護教諭
幼稚園・・・林園長・5歳児担任那須教諭・奥山養護教諭・片山教務
特別支援コーディネータ・・・早坂教諭
- 5 内 容 (1) 小学校の授業参観 11月18日（水）（13：55～5校時）
幼稚園の保育参観 11月19日（木）（9：00～13：30に適宜）
(2) 協議会（15：30～16：30）
 - ・1年生の様子について
 - ・5歳児の様子について
 - ・幼小連携の充実にむけて（今後の交流活動の予定確認）*コロナ禍のため、5月12日に予定されていた第1回目の幼小連絡会が行われなかったため、第1回目幼小連絡会で話し合われるはずであった1年生の情報交換も併せて行うこととなった。

話し合いの様子（一部抜粋）

【小学校より】

- ・現在はフェスティバルに向けて準備に取り組んでいる。子どもたち同士仲良く、助け合う姿が見られる。配慮を必要とする子どもに対しても友達が温かく接しており、幼稚園から育まれた関係性を感じる。
- ・コロナ禍のために10名程度の分散登校となった。少人数の登校が、子どもたちにじっくり関わる機会となり、学校に慣れていく必要がある1年生にとってはよい時間となった。
- ・参観を終えて、遊びの中に学びがあることがわかった。授業の中での子どもたちの姿（作品の改良、材料の選定、ルールづくり等）に、園での体験が活かされていると感じる。

【幼稚園より】

- ・小学校1年生を参観することで、5歳児の就学に向けての取り組みを改めて考えるきっかけとなる。小学校と交流しながら、小学校へのイメージをもたせ小学校へ送り出したい。
- ・年齢と共に自分の思いを表現できるようになってくる。園生活では、「どうしたいの？」と子どもたちに問い、子どもたちの思いを大切にしている。

6 成果と課題

- 配慮を必要とする子どもへの対応等について、幼小共通理解のもと丁寧に引き継ぎしておくことの大切さを感じた。1年生の現状を聞くことで現在の5歳児における保育で留意すべきことや就学に向けての準備について、改めて振り返ることができた。
- ▼幼稚園と小学校とが保育や授業の「子どもたちの姿」を一緒に見て語ることで、子どもたちを見る見方を互いに理解し、アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムを共に作成し幼小連携を積み上げ充実させていきたい。

第3回幼小連絡会 報告

1 ねらい

入学児童の情報を得て、令和3年度の学級編制、指導等に生かすとともに、幼・小お互いの教育方針とその実態について情報交換しながら、望ましい連携で子どもを育ていくことを確認する。

2 日時 2月10日（金）

3 場所 ○学習参観 各教室 ○話し合い 教育実習室

4 出席者

附属小学校 樋口校長、高橋教頭、渡邊教務、長岡教務副、鈴木養護教諭、早坂特別支援コーディネータ、鎌田メンタルケアコーディネータ、水川1年主任、1の2担任大澤教諭、1の3担任相澤教諭

附属幼稚園 林園長、片山教務、奥山養護教諭、年長児担任那須教諭

5 活動内容

①学習参観 5校時 13:55～14:40

各教室（1組：生活科、2組：国語、3組：算数）

②話し合い 15:30～16:30 会議室

6 話し合い

（1）小学校から

教頭より、令和3年度入学児童選考の経過と結果についての報告があった。データが残っている平成18年度からの15年間で、一般の倍率が一番高かったことや、新型コロナウイルス感染症に対応するための「特例措置」として追検査を実施したこと、附属幼稚園園児の各試問での様子について、幼稚園、小学校双方で確認された。

（2）幼稚園から

年長児担任の那須教諭から、学年方針及び子どもや保護者の全体的な様子についての報告があった。その後、配慮を要する園児や支援の必要な園児について、幼稚園での様子や家庭での様子についての情報提供があり、学級編制での配慮や今後の小学校生活に生かしていく視点で話し合われた。

（3）今後の幼小連携について

水川1年主任から、新型コロナの感染状況に鑑みて延期していた交流活動を是非これから実施したいとの提案があり、2月16日（火）の3・4校時に、授業参観と交流活動を行うことになり、1年生が急遽招待状を作成し前日幼稚園に届けることになった。

7 成果と課題

○ 配慮を要する園児や支援の必要な園児への対応等について、幼小共通理解のもと丁寧に引き継ぎしておくことの大切さを感じた。附属学校のよさとして、コーディネータの活用があるので、継続して情報を共有していきたい。

▼ 直接交流することを通して、1年生は年長者として自覚したり、1年間の自分の成長を実感したりできるし、年長児も小学校生活の見通しを持つことができる。コロナ禍においても実施できる交流活動を工夫し、学びの場を保障していく必要がある。

のを園児に届けることにした。園児にとっては小学校での給食について学ぶこととなり、小学生にとっては、相手意識を持って伝える経験をする事となった。



これから配膳の仕方を教えます。同じくらいの量になるように盛ります。お盆と牛乳は机の上に置きます。おかず、ごはんやパンは、配り係の人が配ります。

給食の様子を解説する動画の一場面

(3) 学習参観・交流活動

2月16日に交流活動を計画・実施した。今回の交流では実際の小学校の授業の様子を参観し、小学校での学習に期待をもつことができるようにするとともに、来年度なかよしペアの1年生、2年生としてかかわりを深めるきっかけとなることをねらって行った。

この交流で初めて幼稚園児と対面することができるということで、子どもたちはどんなことをすると、園児が小学校を楽しみにしてくれるようになるか意識して活動内容を考えることができた。当日は朝から緊張し、会えるのを楽しみにしていた。実際の交流では、園児に優しく声をかけるなど、これまで自分たちがしてもらった経験を生かして、園児とかかわることができていた。



お互いに自己紹介する場面



学校探検をして、校内を案内する児童

5 成果 (○) と課題 (▼)

幼稚園

- 初めて小学校に行くということでとても緊張していたが、体育館に入ると発表する1年生の素晴らしい姿に圧倒され、「すごいね」「かっこいいね」と夢中になって観ていた。「僕たちも1年生になったらするの」「ステージのぼってみたいな」「やってみりたいな」と1年生になることを楽しみにしている様子が伺えた。

- 給食準備の動画を繰り返し見ることができ、いつも以上に具体的な流れや動きが分かった。「早く食べてみたいな」「盛り付けはどのくらいするの」「楽しそう」など、給食を楽しみにしている子どもたちが多かった。また、実際に園で給食を食べることができたことで、緊張感なく安心して食べる良い経験となった。(保護者のサポートあり)
- これまで通りの交流活動はできなかったが、授業を見せてもらったり、学校探検にでかけたりと小学校への期待が膨らむ活動を考えてもらった。直接的な関わりは少なかったが、頂いた手紙やDVDを通し、つながりが感じられ子どもたちはとても喜んでいて、子どもの思いがさらに伝わるような交流活動を考えていきたい。

学校

- 撮影の時は観客がいない中での発表を想定していたので、園児たちが観てくれることで緊張感が生まれ、子どもたちが一生懸命演技に取り組む姿が見られた。フェスティバルを見ての感想が届き、子どもたちはとても喜んでいて、子どもたちの達成感がさらに大きくなった。
- 交流活動はなくなったが、相手が学校を楽しみになるにはどのようにすればいいかを考えて手紙を書いたり、動画を撮影したりすることができた。来年の仲良しペアの子がだれになるのか楽しみにする様子が見られた。
- コロナウィルス感染症予防のための延期や中止になることが増えた。当日は交流できない時も動画配信など、新たな方法に挑戦することができた。今後も直接の交流を大切にしながら、状況に合わせた交流の方法を検討していきたい。

園児と中学生の交流学習

1 ねらい

(中学校)

- ・幼児との遊びや会話などを通して幼児に親しみを持つことができる。
- ・幼児と楽しく交流する方法を工夫し、ふれあいの楽しさを味わうことができる。
- ・幼児との会話や遊びから、幼児の興味・関心の傾向をつかむことができる。

2 日 時	令和2年10月8日 (木)	9:00～ 9:30	<3年1組>
		10:00～10:30	<3年3組>
	10月12日 (月)	9:00～ 9:30	<3年2組>
		10:00～10:30	<3年4組>

3 場 所 山形大学附属幼稚園

4 参加生徒 附属中学校 第3学年 135名

5 活動内容

(1) 幼稚園の4クラス(年長1、年中1、年少2)に男女8～9人ずつ分かれて入り、園児と交流した。

(2) 遊び

- ①園庭：鬼ごっこ、かけっこ、砂遊び、鉄棒、ままごと、遊具遊び、草木遊び
- ②室内：工作、折り紙、お絵かき、ままごと、フラフープ、絵本の読み聞かせ

(3) 事前学習

- ①幼児への関わり方について学習し、幼児と楽しく交流するための工夫を考えた。
- ②今後の学習につなげるために幼児についての観察のポイントを確認した。
- ③幼児と交流する際の約束や注意点を確認した。

6 成果(○)と課題(▼)

○生徒にとって保育の学習は、生活体験を土台とした考えができないばかりか、すぐに生活に生かすことが難しい内容である。そのため、園児との大変貴重な体験となった。交流後、幼児に対してさらに興味・関心を持ち、学んだことを振り返りながら学習を進めることができた。さらに「幼児の遊び企画書」作成の場面でも、交流した園児を思い出しながら課題を設定し、取り組むことができた。

○交流後、幼稚園の先生方から生徒の様子を具体的にお聞きすることができ、その後の指導に役立てることができた。

▼今後、交流学習の回数を増やしたり、さらに交流を深めたりできるような取り組みを検討していきたい。



中学生による幼稚園運動会手伝い

1 ねらい

幼稚園：中学生のお兄さんやお姉さんに親しみと憧れをもつようになる。

中学校：幼稚園運動会ボランティアを通して、幼児との関わりを学び主体的に運営を手伝う。

2 日時 令和2年9月12日（土） 8：30～12：00

3 場所 山形大学附属幼稚園

4 参加者 ボランティア希望の3年生14名
引率 教頭

5 内容 ・園児指導、世話 ・競技の試技、補助 ・道具などの準備、片付け

私は、附属幼稚園にいたので、運動会をととてもつかしく感じました。どうやったら園児と仲良くなれるか、言うことを聞いてくれるかを自分自身考えるきっかけになり、良い経験になりました。今、家庭科で行っている遊びの企画書づくりに活かしていきたいです。 （3年 園児）

幼稚園児との接し方をボランティアで学んでいくうちに、先生方の凄さを深く感じることができました。私は弟と妹がいますが、自分の家族への対応と他の子どもへの対応は違うのでいつもよりも子どもの話をよく聞くようにしましたが、話を聞きすぎると、自分勝手になってしまっていたので、注意の仕方を工夫することが大切だと思いました。 （3年 園児）



6 成果（○）と課題（▼）

○今年度はコロナ禍により、中学校吹奏楽部によるファンファーレは実施できなかったが、例年通り充実した活動になった。中学生が運動会運営に積極的に参加し、周囲の状況を見て機敏に働こうとしたり、園児に対して優しく丁寧に接しようしたりする姿は、微笑ましくも頼もしい姿であった。附属学校園としての連携のよさを感じるよい機会となっている。

○この運動会での交流後、家庭科学習において中学生との交流保育が行われた。運動会での触れ合いの体験から、中学生により一層親しみを感じ、積極的に関わり遊ぶ姿が見られた。

「小中合唱交流会」

1. ねらい：音楽を通して、附属の小中学生がともに過ごすことで、つながりを感じたり互いの様子を理解したりする。

2. 目 標

附中生の目標

来年ともに生活する後輩に、歌を通してメッセージを送ることで、よりよい附中をつくっていかうという意識を高める。

附小児童の目標

来年ともに生活する先輩との出会いを通して、今の自分を見つめ、新しい生活への意識を高めることができる。

3. 日時・場所 11月12日（火）・附属中学校体育館

4. 音楽交流会の次第

進行 附中生徒

1. 開会のことば
2. 中学校 合唱コンクール優秀クラスの発表
3. 中学生の合唱発表
4. とともに歌おう 「翼をください」
5. 感想発表
6. 閉会のことば

5. 当日の動き

- | | | |
|--------|-----|-------------------|
| 13：15～ | 附小生 | 附中体育館に移動 |
| 13：20 | 附中生 | 六稜ホールで合唱練習（20分ほど） |
| | 附小生 | 体育館で合唱練習 |
| 13：40 | 附中生 | 体育館へ移動 |
| 13：50 | 開会 | |
| 14：20 | 閉会 | 附小生、小学校へ移動 |

6. 次年度へ向けて

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため、合唱交流会は実施できなかった。例年であれば、上記のような内容で交流を行っていた。子どもたちもこの交流会を楽しみにしていたが、この状況を受け入れるしかないと考えているようであった。音楽科では6月に学校再開された後も、それぞれの学校で授業のあり方について模索しながら取り組んできた。現段階では、来年度もコロナ感染の予防をしながら音楽に関わらなければならないと予想される。声を出して歌うことや一つの場所に大勢集まって合唱することに制限があることを考えると、当面の間、合唱による交流会は難しいと思われる。合唱の様子を録画し合い互いの学校で鑑賞し合い感想を伝えることもできなくはないが、これまでのような感動は得られないのではないかと思う。現在、附属小学校の6年生は、中学校の授業の様子や部活動の様子を見学に来ている。その活動を中心に連携を考えていってもいいのではないかと考えている。

幼稚園と特別支援学校小学部の交流及び共同学習

1 ねらい

幼稚園

特別支援学校の友達や先生と一緒に遊び、親しみを持つようになる。

特別支援学校小学部

幼稚園の友達や先生と同じ場で遊ぶことを通して、友達と一緒に遊ぶことや遊びの持つ楽しさ、面白さに気付く。

2 参加者

幼稚園 年少児 19名

特別支援学校 小学部 1組児童 5名

3 日時、場所、内容

	日 時	場 所	内 容
第1回	11月18日(水) 10:00~11:15	幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> 1日目は、幼稚園の遊戯室で、山形大学の学生の音楽教室と一緒に参加した。知っている歌に身体を動かしながら聴いたり、その場で「パプリカ」を踊ったりしながら楽しんだ。 幼稚園の園庭の滑り台などの遊具や砂場等で好きな遊びを見つけて遊んだり、焼き芋の活動に参加したりした。雨天時は、保育室でごっこ遊びや工作等をして交流した。
	11月19日(木) 10:00~11:15		
	11月20日(金) 10:00~11:15		
第2回	1月28日(木) 10:55~11:45	特別支援学校	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援学校の体育館やプレイルームで、羽根付きや凧揚げ、福笑い、かるた、だるま落としなどのお正月の遊びを一緒にしながら交流した。
事前・事後の学習	<p><幼稚園></p> <ul style="list-style-type: none"> 事前学習として、支援学校の友達が来園することを伝え、一緒に音楽教室で鑑賞したり、遊んだりする活動内容を伝えた。 第2回の交流では、特別支援コーディネータが作成した支援学校内の写真カードを利用し、自分たちが過ごさせてもらう環境を事前に確認し、入ってはいけない場所や利用の注意点などを確認した。 一緒に遊んだ写真を見ながら感想を語り合い、支援学校の友達へ手紙やプレゼントをつくろうと振り返りを行った。 <p><特別支援学校小学部></p> <ul style="list-style-type: none"> 第1回の交流の事前学習では、幼稚園の園庭で園児たちが遊ぶ様子を昨年度の写真で見ながら、遊び場や活動の流れを確認した。また、幼稚園でどんな遊びをしているかを聞き、さつまいも掘りや「わくわくひろばであそぼう」といった同じような活動を行い、交流することを楽しみにした。第2回の交流の事前学習では、幼稚園の友達に遊び場を紹介するための練習を行ったり、遊び道具の準備を行ったりした。 事後学習では、毎回交流時の写真を元に遊びの様子を振り返った。第2回の交流の事後学習では、楽しかった活動を写真で振り返りながら、幼稚園の友達に向けて手紙を書いた。 		

4 成果（○）と課題（▼）

幼稚園

- 今年度は後期からの交流となり、園児、児童共に学校園の環境にすっかり慣れた状況での活動となった。今回は、園内の音楽鑑賞の行事予定日が変更し、交流1日目と重なったため、共に鑑賞するという新しい試みが実現した。同じ音楽を聴き一緒に歌ったり踊ったりと、新たな活動で友達を感じることでできるよい機会となった。
- 雨天のため外遊びが叶わない日もあったが、各学年の保育室をオープンにし、支援学校の児童が自ら過ごしたい場所を選択し自由に遊びに加わってもらえることができた。ままごと道具や積み木などの道具を支援学校の児童と貸し借りする姿、遊びに自然に加わる様子が見られると共に、使ってほしくないときには「壊さないで」などと素直に気持ちを表現する場面も見られた。
- 第2回目、支援学校での交流では、遊び前に支援学校児童の進行による「はじめの会」があり、その中でこれから体験できる遊びの説明を受け、活動の見通しをもって臨むことができた。「はじめの会」では、園児、児童が好んでいる「パプリカ」のダンスを共に踊ることでさらに親近感をもつことができた。会話でやりとりすることは少ないが、同じ遊びを通して自然に場を共有したり、追いかけてっこが始まったりと距離感が縮まるのを感じた。
- ▼今年度、年中児の焼き芋を共に体験してもらおうことも考えたが、限られた時間であるため、たき火での焼き始めから焼き上がりまで十分に体感してもらえなかった。自ら選んだ活動、一斉活動、製作体験等、子ども達にとってよりよい体験や関わりとなるよう支援学校の先生方と話し合い、次年度に向けて内容を検討していきたい。
- ▼第2回目の交流は年少児と児童との交流になるが、なかなか児童の名前を意識することができなかった。事前指導の中に児童の顔、名前を意識できるような手立てをとるよう工夫し、次年度の交流でも以前の交流体験が呼び起こされ、積み重ねていけるようにしたい。

特別支援学校小学部

- 幼稚園の園庭では、砂場、築山での石や木の葉など自然の中の素材を自分から見付けて遊びに向かったり、滑り台等の遊具で遊んだりする児童の姿が見られた。室内では、幼稚園児が行うままごとや積み木等の用具を使った遊びをまねて一緒に遊ぶ児童もいた。児童からは、「楽しかった。」「また遊びたい。」という声も聞かれ、遊びの面白さに気付き進んで遊ぼうとする姿が見られるようになった。
- 交流を重ねるごとに、児童が園児に近づいたり、簡単な言葉を交わしたりしながら遊ぶようになった。児童から園児に直接言葉を掛けることは少なかったが、教師が間に入ることで、集団で遊ぶ園児の中に入って同じ場で同じ遊びを楽しむことができた。また、第2回の本校での交流では、遊びに入る前に児童たちが行った学習活動であるお正月の遊びを児童自身が紹介する時間を取った。そうすることで、児童が園児に対して、自分たちが学んだ遊びを直接伝える機会とすることができた。
- ▼園児に対してより児童のことを知ってもらうために、本校での交流では、自己紹介をする場を設けたり本校に園児を招く際に招待状を渡したりする等の活動や、年間計画に作品交流等の間接交流を仕組むことで、児童同士の関心が更に高まることが考えられる。また、教員間で情報交換を行い、児童と園児双方の興味関心に基づいた全員で取り組める活動を意図的に設定することで、よりかかわり合いながら活動することも期待できる。今後は、自由遊びの良さと設定遊びの良さ、両面を考えながら、よりよい交流に向けて活動内容を検討し計画していきたい。



幼稚園と特別支援学校高等部との交流及び共同学習

1 ねらい

幼稚園

- (1) 買い物、作業見学を通して、特別支援学校高等部の生徒と触れあい、親しみをもつ。
- (2) いろいろな製品の中から100円以内で自分の買いたいものを選んで買う。
- (3) バスの乗車の仕方、乗車の決まりを知る。

特別支援学校

- (1) 幼稚園児への作業活動や販売活動を通して、人とのかかわりや販売のつながりがわかる。
- (2) 相手や周りの状況に合わせて活動したり、自分の役割を工夫したりして、作業活動や販売活動に取り組む。
- (3) 責任感をもって、自分の役割に取り組む。

2 日時 令和2年12月14日(月) 10:30~12:00

3 場所 山形大学附属特別支援学校 多目的室、各作業室

4 参加者 附属幼稚園 年中児 30名、 附属特別支援学校 1、2、3年生 20名

5 内容

- (1) オンラインでの事前の顔合わせと各作業グループの製品の紹介。
- (2) 作業学習で製作した製品の販売と購入。各作業グループの作業紹介と見学。
- (3) 幼稚園で使用している作業製品のメンテナンスと作業見学。

6 成果(○)と課題(▼)

幼稚園

○事前に、製品づくりの参考にするためにということで好きな色の調査があったり、オンラインで顔合わせや製品の紹介をしてもらったりした。交流の見通しをもつことができ、「あれ(オンラインで見せてもらった製品)買いたい」「早く行きたいな」と楽しみにする園児の姿が見られた。

○バザーと作業の見学、園児はどちらも興味津々で参加していた。バザーでは、本物のお金でどの製品を買うか考えながら買い物をする貴重な機会となった。交流後の園生活では、特別支援学校のお兄さんやお姉さんを真似て、お店屋さんごっこをして遊ぶ姿が増えた。また、作業の見学では、幼稚園で使用している棚やベンチなどを修繕する様子も見せてもらい、「りんご組の棚を直してくれているんだ!」と関心をもって見学していた。修繕の様子を実際に見学したことで、道具を大切に使う態度につながっていた。

▼事前に指導者間で配慮が必要な子どもについて情報交換しておく、よりスムーズに交流することができると考えられる。

特別支援学校

○事前にオンラインで園児とやり取りを行ったことで、作業グループでの製品作りや当日の販売への意欲につながった。作業中は、園児たちの好みを考えながら色やデザインを考えたり、扱いやすい製品にすることを考えたりするなど、販売する相手をよく考えながら製品作りに取り組むことができた。また、バザー当日は、生徒から優しく声を掛けたり、かがんで製品を渡したりするなど、園児を気遣いながらかかわる生徒の姿も見られた。

○幼稚園の保護者よりアンケートにご協力いただいたことで、いただいたコメントから生徒の意欲や学びにつなげることができた。

▼作業紹介の方法や見学時の人数などは、園児への分かりやすさや見やすさからも、更に工夫していきたい。



小学校と特別支援学校小学部の交流及び共同学習

1 ねらい

小学校

ペアの児童や学級で一緒に活動することを通して、気持ちや考えを伝え合ったり、感じ取ろうとしたりしてコミュニケーションをとろうとする素地を育てる。

特別支援学校小学部

小学校の友達と様々な活動を通してかかわりながら、気持ちや考えを伝え合い一緒に活動する楽しさを知る。

2 参加者

小学校 複式学級 3、4年児童 12名

特別支援学校 小学部 3～6年児童 12名

3 日時、場所、内容

	日 時	場 所	内 容
第1回	10月 6日 (火) 10:25 ～11:30	特別支援学校	「ともだちをしろう」 ・学級ごとの自己紹介 ・ペアの児童同士の顔合わせ ・ペアの児童同士での自由遊び（トランポリン、おにごっこ、滑り台、フライングディスク等）を行った。
第2回	11月27日 (金) 10:20 ～11:30	特別支援学校	「ともだちとなかよくなる①」 ・小学校の児童が準備した企画遊び（まとあて、絵ビンゴ）を学級で行った。 ・ペアの児童同士での自由遊び（トランポリン、ボール遊び、フライングディスク等）や特別支援学校の児童が学習の中で行ったお店屋さんや3匹の子ぶたの家を使った遊びを行った。
第3回	1月19日 (火) 10:20 ～11:30	特別支援学校	「ともだちとなかよくなる②」 ・小学校の児童が準備した手話付きの紙芝居の読み聞かせを学級ごとに行った。 ・ペアの児童同士で自由遊びや特別支援学校の児童が学習の中で行ったお正月の遊び（羽根付きや凧揚げ等）で遊んだ。 ・終わりの会では第1回、第2回よりも長く時間をとり、振り返りを中心に交流した。
事前事後の学習	<p><小学校></p> <ul style="list-style-type: none"> 事前学習として、昨年度作ったペアの「好きなこと」や「仲よくなるコツ」を書いた「ペアブック」を読む時間を設けた。また、4年生の昨年度の経験を共有し、活動への期待感と見通しをもつことができるようにした。 新型コロナウイルス感染防止の観点ももちながら、仲良くなれるような交流の方法について話し合った。 「思いを伝えるために」をテーマに、タイムでの学習を設定し、手話を活用した表現や福祉の学習を行った。 <p><特別支援学校小学部></p> <ul style="list-style-type: none"> 事前学習では、学級ごとに小学校のペアの友達や前回の活動の様子の写真を見ながら活動の流れを確認したり、ペアの友達とどんなことをして遊びたいかを考えたりしながら次回の交流への期待感を高めたりした。 事後学習では、毎回学級ごとに交流の様子を写真ですぐに振り返り、楽しかったことなどの思いをペアの児童に向けた手紙に表した。 		

4 成果（○）と課題（▼）

小学校

- 3年生にとっては初めての体験となるため、先が見通せないこともあったが、昨年度の様子を楽しそうに話す4年生の姿を見て、期待感をもって交流活動を始められた。第1回の交流会では、3年生は少しびっくりした様子も伺えたが、会を重ねるごとにペアの児童への話しかけ方や得意なことを理解して接することができるようになった。
- 学級通信を活用して保護者へ周知することで、日常の中でも「福祉」の目をもち、生活に生かす児童が多くいた。
- 始めは、「してあげる」という思いが強かったが、第3回の交流会では特別支援学校の児童が『自分から「何して遊びたい？」と聞く』ことをめあてに活動してくれたこともあり、自分の意思も相手に伝えようとする姿勢が見られた。自分のかかわり方を見直すと共に、「友達」としての思いが高まった。
- ▼ 今年度は3回という限られた時間だった。やっと3回目にして、思いを伝え合える関係性になった児童が多く見られた。あと数回の交流があれば、児童の変容が大きく見られるのではないかと感じた。

以下の2つは、第3回交流会の振り返りである。これらから、自分と相手のどちらか一方ではなく、互いに相手を尊重し合う関係でいることが大切であることを感じていることが伺える。

紙芝居の時に手話がちゃんと相手に伝わったか心配になりました。でも、自分でも練習をすれば手話を身につけることができることが分かったのがうれしかったです。自由遊びのときに、はじめて自分からやりたい遊びを伝えました。思っていたよりもすんなり伝わって少しびっくりしたけど、よかったなと思いました。最後の交流会がおわってしまいましたが、交流したことや覚えた手話もどこかで役に立てられればと思います。（4年児童）

今日はとてもいい思い出になりました。なぜなら、たくさん笑ったし、お互いにやりたい遊びを出し合えたからです。例えば、かるたをしていた時に、2人で大笑いしたり、私から「羽根つきしようよ」と誘ったりすることができました。あと、自由遊びが終わった後に、1回目や2回目では3分くらい遅れてしまっていたけど、今日は時間通りに戻れました。相手に伝わったのと、少し早めに声をかけたのが良かったのかなと思います。（3年児童）

特別支援学校小学部

- 自由遊びでは、本校児童が遊び慣れた遊具遊びや、学習の中で行ったり製作したりした遊び場を設定した。そうすることによって、本校児童がスムーズに遊びに入ったり、小学校児童とやり取りをするきっかけになったりと主体的に活動することができた。また、第2回交流から実施した小学校の児童が企画する活動は、どの学級の活動も本校児童のことを考えた遊びになっていた。興味関心を取り入れた遊びや分かりやすい遊び方の工夫もされており、小学校の児童たちの思いが感じられた。本校児童もかかわりながら遊んだり紙芝居を聞いたりすることができた。
- 回を重ねるごとに、初対面であった児童同士もお互いに近寄っていったり、自然と一緒に移動したりするようになった。自由遊びの場面では、イラスト等を活用しながら、児童同士がお互いにやりたいことを伝え合ったり、小学校児童の意見を聞いて考えたりする姿も見られた。こうした経験を通して、一緒に遊ぶ（活動する）良さを感じることに繋がったと思われる。第3回の交流では、「ありがとう」と感謝の気持ちをもつ児童もおり、かかわりの深まりが感じられた。
- ▼ 事前に本校児童が小学校児童とどんな活動をしたいか等、気持ちや考えを聞き取りながら、体育館やプレイルーム等での遊び場の企画や準備等を行うことで、より主体的にかかわりながら交流することも期待される。今後も、感染症対策を行いながら、双方の児童にとって主体的・対話的で深い学びとなるように、交流及び共同学習を計画、実施していきたい。



附属中学校と附属特別支援学校中学部の交流及び共同学習

1. ねらい

- (1) 附属中学校の生徒と一緒に活動することや活動内容が分かる。
- (2) 附属中学校の生徒と音楽の授業を通して、歌声の美しさや豊かな響きを感じ、それを表情や身体などで表現しながら活動する。
- (3) 同年代の友達と一緒に活動する楽しさを感じながら、相手に関心を持ったり自分からかかわろうとしたりする。

2. 日 時（新型コロナウイルス感染症対策のため両日とも中止）

令和2年11月24日（火） 13：30～14：20
令和2年12月 8日（火） 10：50～11：40

3. 場 所

附属中学校 六稜ホール

4. 参加生徒

附属特別支援学校中学部 附属中学校1年生

5. 活動内容：テーマ「音楽に親しもう、一緒に歌おう」

今年度も、附属中学校で交流及び共同学習を2回計画していた。内容は、初めに附属特別支援学校は学級ごとに学習の紹介、附属中学校は学校紹介と合唱コンクールでの歌の発表、その後にグループごと自己紹介をしてお互いを知った後、附属特別支援学校の音楽で取り組んでいる表現活動を中心に共に活動、最後は附属中学生が伴奏を行い、それに合わせて全員で斉唱、感想を発表し合うという予定だった。

6. 次年度へ向けて

今年度は新型コロナウイルス感染症対策等を踏まえ連携活動が実施できなかった。学校再開後、それぞれの学校で音楽科の学習内容（歌唱、器楽、表現活動など）については、できることを模索しながら取り組んできた1年だった。

現段階では、次年度もしばらくコロナ禍が続くと予想される。生徒たちが安心して自分の思いや考えを伝え合ったり、共に学びを共有したりできるような活動を行うにあたり、来年度実施可能な連携活動として考えられるのは、ICT機器の活用である。例えば、ICT機器で学校間をつなぎ楽器を使った表現活動を通してともに音楽づくりを行ったり、歌唱や合奏を事前にビデオに撮り感想等を伝え合ったりする活動などが挙げられる。リアルタイムに自分の考えを伝えたり、感想等を話し合ったりすることができれば生徒にとっても分かりやすく、さまざまな人とかかわる力、その場でどのように対応するか考え取り組んだりする力の育成につながると思う。

歌唱、表現、器楽については、感染症対策の徹底に努め学習を行っていく必要があるため、詳しい活動内容や時期については、現状を踏まえながら早めに担当者で検討し計画していきたい。

Ⅱ 山形大学附属学校 研究・連携推進委員会規定

○山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程

(平成 28 年 4 月 1 日制定)

(設置)

第 1 条 山形大学附属学校運営規程第 8 条の規定に基づく附属学校運営会議の専門委員会として、山形大学附属学校研究・連携推進委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(目的)

第 2 条 委員会は、附属学校における研究を推進し、かつ、附属学校間の連携を推進することを目的とする。

(審議事項)

第 3 条 委員会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 大学と各附属学校とが連携した教育研究及び実証の推進に関する事項
- (2) 公開研究会及び大学と各附属学校との共同研究に関する事項
- (3) 附属学校間の連携の基本的方針に関する事項
- (4) 附属学校合同研修会に関する事項
- (5) 幼小連絡会及び小中連絡会に関する事項
- (6) その他前条に規定する目的を達成するために必要な事項

(組織)

第 4 条 委員会は、次に掲げる委員で組織する。

- (1) 附属学校運営部長
 - (2) 附属学校運営副部長(研究担当)
 - (3) 附属学校運営副部長(教育実習担当)
 - (4) 主担当教員として地域教育文化学部配置された教員の中から選出された者 3 人
 - (5) 主担当教員として大学院教育実践研究科に配置された教員の中から選出された者 1 人
 - (6) 附属学校の校長(幼稚園にあっては園長。以下「附属学校長」という。)
 - (7) 附属学校の教頭
 - (8) 各附属学校研究部長
 - (9) その他委員会が必要と認める者
- 2 前項の第 4 号、第 5 号及び第 9 号に掲げる委員の任期は、2 年とする。ただし、委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第 5 条 委員会に委員長を置き、前条第 1 項第 1 号に掲げる委員をもって充てる。

- 2 委員長は会務を掌理し、委員会を代表する。
- 3 委員長に事故があるときには、前条第 1 項第 2 号に掲げる委員がその職務を代理する。

(会議)

第6条 委員会は、委員長が招集する。

- 2 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、会議を開き、議決することができない。
- 3 委員会の議事は、会議に出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。
- 4 前項の場合において、委員長は、委員として議決に加わることができない。
- 5 委員長は、審議結果を山形大学附属学校運営会議に報告しなければならない。

(部会)

第7条 委員会の下に、次の3つの部会を置く。各部会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

(1) 共同研究推進部会

大学と附属学校の共同研究について計画し、実施する。

(2) 幼・小・中連携部会

附属幼稚園、附属小学校及び附属中学校の連携について計画し、実施する。

(3) 特別支援連携部会

附属特別支援学校とその他附属学校の連携について計画し、実施する。

(事務局)

第8条 委員会に事務局を置く。事務局は各附属学校の教頭が持ち回りで担当し、委員会運営に必要な庶務を行う。

(その他)

第9条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附 則

- 1 この規程は、平成28年4月1日から施行する。
- 2 次の規則は、廃止する。
 - (1) 山形大学附属学校研究推進委員会規則(平成17年3月7日制定)
 - (2) 山形大学附属学校連携委員会規則(平成21年6月1日制定)

III 資料

山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程第7条に定める部会に関する申し合わせ

令和2年11月24日

附属学校研究・連携推進委員会了承

1 目的

山形大学附属学校研究・連携推進委員会規程第7条に定める「共同研究推進部会」、「幼・小・中連携部会」、「特別支援連携部会」の各部会の運営について、下記のとおり申し合わせる。

2-1 共同研究推進部会

- (1) 大学と附属学校の共同研究を推進することを目的とし、大学教員及び附属学校教員で構成する。
- (2) 共同研究推進部会は、下表に示す(1)国語教育から(15)養護までの研究部会で構成する。
- (3) 研究部会への所属については、原則年度初めに附属学校研究・連携推進委員会において確認する。所属確認は附属学校教員または大学の同部会員の推薦と本人の同意に基づいて行う。
- (4) 地域教育文化学部及び教育実践研究科の教員はいずれかの研究部会に積極的に所属するものとする。附属学校教員は原則いずれかの研究部会に所属するものとする。地域教育文化学部以外の教員についても、研究部会員の推薦に基づいて研究部会に所属することができる。
- (5) 各研究部会は2人以上で構成し、各研究部会に大学教員の中から選出した部会長1人を置く。
- (6) 研究部会の設置及び改廃等に関する事項は、附属学校研究・連携推進委員会において決定する。
- (7) 各研究部会は、年度当初に研究テーマを決定の上共同研究を行い、年度末に附属学校研究・連携推進委員会に研究結果報告を行うものとする。各研究部会の研究テーマは、各附属学校の公開研究会のテーマと関連した研究テーマや、他の主体的研究テーマとする。
- (8) 研究部会に所属する大学教員は、各附属学校の公開研究会において、指導助言者ではなく、共同研究者として積極的な役割を果たすものとする。

【研究部会の構成】

- | | | |
|------------|-------------|-------------|
| (1) 国語教育 | (2) 社会科教育 | (3) 算数・数学教育 |
| (4) 理科教育 | (5) 音楽教育 | (6) 造形・美術教育 |
| (7) 保健体育教育 | (8) 家政教育 | (9) 外国語教育 |
| (10) 幼児教育 | (11) 学校外教育 | (12) 道徳教育 |
| (13) 生活科教育 | (14) 特別支援教育 | (15) 養護 |

2-2 幼・小・中連携部会

- (1) 附属幼稚園, 附属小学校, 附属中学校の連携について具体的に計画し, 実施することを目的とする。
- (2) 幼・小・中連携部会は, 附属学校運営副部長(2人), 学部選出の研究・連携推進委員会委員(1人), 幼・小・中の各教務主任(3人), コーディネータ(3人), 各研究部長(4人)で構成する。
※座長は, 研究担当の附属学校運営副部長が務める。
- (3) 部会の開催は, 議題に応じて, 次の方法のいずれかとする。
 - (a) 研究・連携推進委員会と同日開催(研究・連携推進委員会終了後に開催)
 - (b) 研究・連携推進委員会と別の日に開催(幼・小・中連携部会+特別支援連携部会の連続開催)
 - (c) 研究・連携推進委員会と部会の合同開催
- (4) 附属小学校を主幹校とし, 作業部会の議題の整理, 会議の案内, 進行等を務めるものとする。

2-3 特別支援連携部会

- (1) 附属特別支援学校と幼・小・中との連携について具体的に計画し, 実施することを目的とする。
- (2) 特別支援連携部会は, 附属学校運営副部長(2人), 学部選出の研究・連携推進委員会委員(1人), 幼・小・中・特の各教務主任(4人), コーディネータ(3人), 各研究部長(4人)で構成する。
※座長は, 研究担当の附属学校運営副部長が務める。
- (3) 部会の開催は, 議題に応じて, 次の方法のいずれかとする。
 - (a) 研究・連携推進委員会と同日開催(研究・連携推進委員会終了後に開催)
 - (b) 研究・連携推進委員会と別の日に開催(幼・小・中連携部会+特別支援連携部会の連続開催)
 - (c) 研究・連携推進委員会と部会の合同開催
- (4) 特別支援学校を主幹校とし, 作業部会の議題の整理, 会議の案内, 進行等を務めるものとする。

山形大学附属学校研究・連携推進委員会委員名簿

(令和2年4月1日現在)

	氏 名	現 職
委員長(1号委員)	中 井 義 時	(附属学校運営部長)
委 員(2号委員)	栗 山 恭 直	(附属学校運営副部長)
委 員(3号委員)	加 藤 健 司	(附属学校運営副部長)
委 員(4号委員)	佐 川 馨	(地域教育文化学部教授)
	野 口 徹	(地域教育文化学部教授)
	後 藤 み な	(地域教育文化学部講師)
委 員(5号委員)	森 田 智 幸	(大学院教育実践研究科准教授)
委 員(6号委員)	林 敏 幸	(附属幼稚園長)
	樋 口 潤 一	(附属小学校長)
	早 坂 智	(附属中学校長)
	高 橋 真 琴	(附属特別支援学校長)
委 員(7号委員)	高 橋 浩	(附属小学校教頭)
	関 東 朋 之	(附属中学校教頭)
	片 桐 睦	(附属特別支援学校教頭)
委 員(8号委員)	伊 藤 真由美	(附属幼稚園研究主任)
	青 柳 孝 一	(附属小学校研究部長)
	大 隅 一 浩	(附属中学校研究部長)
	柴 田 雄一郎	(附属特別支援学校研究主任)
委 員(9号委員)	片 山 敬 子	(附属幼稚園教務主任)
	渡 邊 弘 晶	(附属小学校教務主任)
	金 澤 彰 裕	(附属中学校教務主任)
	近 藤 真知子	(附属特別支援学校教務主任)
	早 坂 美 紀	(特別支援教育コーディネータ)
	鎌 田 弘 子	(メンタルケアコーディネータ)
	佐 藤 大 将	(英語教育コーディネータ)

※4号, 5号及び9号委員の任期は2年 (R2.4.1~R4.3.31)

編集後記

大学と附属学校園との共同研究・連携活動の更なる充実を目的として組織の編成が行われ、「附属学校研究・連携推進委員会」が発足して5年目、連携活動としては12年目となる。現在、国立附属学校園を取り巻く現状は厳しく、有識者会議では、「附属学校園の存在意義」についての今後の見直し、改善に対する提言がなされた。山形大学附属学校園においても、令和3年度末までには、今後の教育の将来構想についての説明を文部科学省に求められている。

附属学校140年の歴史の中で脈々と受け継がれてきた「養成から研修まで、学生及び教員を育てる学校」「地域の学校、教員のモデルとなる教育・研究を進める学校」「附属学校園の子どもを健全に育てる学校」という3つの目標を達成するために、今後より一層、意図的・計画的・組織的・継続的・発展的に教育実践を積み重ねていく必要がある。

そのためにも、抜本的な働き方改革の実施や、新形コロナウイルス感染症対策、GIGAスクール構想に基づくICTを活用した教育の推進等、喫緊の課題に先進的に取り組みながら、未来を担う子どもたちにとってのかけがえのない学びとなるよう、大学と附属学校、そして附属学校園間の連携活動をより一層推進していきたい。

令和2年度 附属学校研究・連携推進委員会事務局
附属小学校 教頭 高橋 浩

令和2年度

附属学校連携活動報告書

発行日 令和3年3月31日

発行者 山形大学

編集者 山形大学附属学校連携委員会

〒990-0023

山形市松波2丁目7番2号